

えいじょうあと 穎娃城跡

【所在地】南九州市穎娃町11767番地など計123筆

【種別】県指定史跡

【指定年月日】平成17年4月19日



穎娃城跡全景

穎娃城は主体部と周圀部からなり、面積は約35ヘクタールが想定される中世山城である。中核となる主体部は、約20ヘクタール程で、当時の様相を良く残している。使用期間については、応永27（1420）年穎娃氏を滅ぼした島津久豊が大隅の巨大国衆肝付氏に配慮して肝付兼元の次男兼政に当地を与え、この時、穎娃城を築き、ここを本城とした。以後、子孫が当城主となり天正16（1588）年の久音まで続いた。

穎娃城については、桂庵玄樹の弟子以安が『以安集』で当城を鶴翼魚鱗の城と歌に詠み、天文16（1547）年に日本に寄港したアルバレスは、日本情報の中で穎娃城に触れ、ヨーロッパ人によって最初に紹介された中世の山城であるといわれる。

また、「穎娃御家聞書」によると天正15（1587）年に久虎は、惣大工田中純貞に百余日で五層の建物を建てさせたとの記述がある等、穎娃城の景観に関する資料に恵まれている。